
マラドーナ

三沢かも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マラドーナ

【Nコード】

N9037D

【作者名】

三沢かも

【あらすじ】

高校3年、サッカー部の僕は最後の大会へ臨んでいた。点差は2点。時間はもうない。足もつってきた。そんなところへ一人の控え選手が交代して入った。

点差は0対2。

時間はロスタイムも入れてあと10分くらいだろう。

僕はさっきスライディングをかわしたときにつりそうになった右足をかばいながらプレーをしていた。

もうプレスもろくにかけられない。

観客席の声援すら遠く聞こえるようになっていた。おそらく観客にはひどい姿をさらしているのだろうが、もうそんなこともどうでもよくなっていた。

今日はディフェンスに忙しい試合だった。

相手チームのミッドフィールダーたちは、自分たちで目が回らないのかと思うほどのポジションチェンジを何度も何度も繰り返し、僕らを錯乱した。

相手の9番がシュートを打った。

いいシュートだったがキーパー正面だったため、キャッチできた。キーパーからディフェンダーへボールが渡され、僕のところへパスが来る。前を向いてどこにパスを出すか考える。10番の澤田の前には相変わらず相手チームの4番が張り付いていた。澤田も振り切るのに疲れたか、運動量が落ちている。もうパスが出せない。

澤田だけじゃなかった。他のチームメイトにも相手チームのマークがしっかりとなされ、みんな振り切れないでいる。ロングパスを出すそうにも、疲れているのは前線のフォアードにしてもそれは同じこ

とだった。僕と同じ役割の守備的ミッドフィールダーが1人、フォワードと交代させられた今、ボール運びの出来る人間が絶対的に不足していた。僕の今の足じゃ、ドリブル突破も不可能だった。

僕がパスする相手を探しながら緩いドリブルをしていると、途端に2人がすごい勢いでプレスをかけてきた。僕は慌ててボールをディフェンスに戻す。

もう勝てない。

そう思った。

前半10分で相手の動きが格上だとわかった。負けたら引退、3年の僕らにとって県予選3回戦、2回戦から参加の僕らとしては早すぎる敗退だった。

全国はそんなに甘くなかった。今年のチームはいけると思った。10番の澤田は何度かJリーグチームのスカウトが見に来るほどだったし、フォワードの柿木は体も大きく、そのくせとても決定力のあるフォワードだった。ディフェンスにも控えにも、うちのサッカー部史上最高の粒が揃っていた。

それなのに。

強豪校にあたる前にこんな普通の高校に負けるなんて。しかも圧倒的に。

僕にまたパスが回ってくる。再び前を向く。相変わらずパスが出せない。ベンチからは顧問の内容のよくわからない怒鳴り声が聞こえ、マネージャーも「動いて!」という悲鳴とも取れるような叫び声をあげている。僕も声を上げる。「動け」と。けれど言葉でどうする

ことも出来ないのはわかっていた。

そこに期待していなかった声が返ってきた。

「日比野さん！一人抜いて！」

2年の水田だった。

15番をつけている水田は10分ほど前に交代して入っていた控えフォワードだった。小柄な体格ですばしこい動きをする水田は、ゴール前に張り、こぼれ玉に強いタイプのフォワードだった。その水田がまだセンターサークルまでボールを運べていない僕と近い距離までパスを受けに来ていた。僕は突然の声に驚き、驚きのあまり水田の声に従順に、プレスをかけにきた2人の相手のうち、足を出してきたほうの選手を交わして前に出た。

その瞬間、右足がつった。

だが辛うじて利き足ではない左足で水田にボールを出すことは出来た。僕はその場に倒れ込んだ。

ボールをもらった水田はボールを受けながら一人をかわし、猛然とゴールに向かってドリブルを始めた。

止めようと追ってくる敵を右から回りこむように走ってかわし、同時にプレスをかけにきた2

人の真ん中を抜いた。

前のめりだった相手チームが急に全員下がります。

こんなチームに1点もやるな、という顔を全員がしていた。倒れていた僕の横を相手チームの選手が数人、もうダッシュで駆け戻っていく。僕は段々と小さくなっていく水田の背中をただ、眺めているだけだった。

3人を突破した水田を止めるため、10番の澤田についていた4番が澤田から外れた。澤田は「水田！パスしろ！」と叫んだ。しかし水田は聞いていない。またぎフェイントを1回使い、全くスピードを落とさずに水田は4番をも抜いた。もうペナルティーエリアは目の前だった。

「行けー！」

僕は叫んだ。

他のチームメイトも叫んだ。柿木が囀として動いたため、最終ラインに残って水田に当たりにいったディフェンダーは少なかった。

水田は一度左足でシュートフェイントをし、最後の1人を引き剥がしたあと、大きく右足を振り切った。

その時もう僕は立ち上がっていた。キーパーは飛びついたが手は届かなかった。ボールがゴールネットを揺らした。応援席からは歓声上がる。ベンチからは相変わらずマネージャーが悲鳴のような叫び声を上げていた。

結局僕はそのあとすぐ交代させられ、試合にはさらにロスタイムに相手の追加点を許し、1対3で敗れた。

けれど、僕の頭の中には負けたということよりも、水田がゴールを決めたあと、ゴール内に転がるボールを自分で信じられないといった様子で見ながら、その場で仁王立ちになり、ゆっくり両手を挙げてガッツポーズをしたその光景が焼きついていた。

僕はそのときはっきりと見えた背番号15の文字は二度と忘れないだろうな、と思った。

そして、こんな終わりもありかな、と思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9037d/>

マラドーナ

2011年1月6日02時07分発行